

Eureka XI

六年制通信 No.32 令和6年1月19日(金)号

ブギウギに泣く

NHKの連続テレビ小説、つまり朝ドラですな、私はこれの一作を全回観たことがないのですが「ブギウギ」だけは、今のところ全部観ています。君たちはもちろん、親御さんも主人公福来スズ子のモデルとなった笠置シズ子の現役時代は知りません。私も知りませんから。私の子どもの頃、笠置さんは素人のど自慢の番組で審査員をしてはりました。他の審査員が辛辣なコメントをする中、笠置さんだけは常に笑顔でどんな下手な出場者でも誉めていたのを覚えています。誰？このおばさん、こんな下手な歌をよう誉めるよなというのが正直な感想でしたが、なぜか嫌な気はしませんでした。

朝ドラにはもう一人、淡谷のり子をモデルにした茨田りつ子が登場します。笠置さんは「ブギの女王」、淡谷さんは「ブルースの女王」として戦前戦後を逞しく生き抜き、第一線の歌手として活躍しました。先週の放送で、菊地凜子演じる淡谷のり子の熱唱に気がついたら涙を流していました。自分でも驚いたのですが、録画してあったのを三回観て三回とも泣きました。前にも言いましたが、役者さんて凄いですね。菊地さん、すっかりファンになってしまいましたよ。

前に日本人は流言飛語に弱いと書きましたが、山本七平の指摘を待つまでもなく、もう一つ顕著な国民性として「右に倣えが好き」というのがありますね。世界のジョークで、溺れている女性を助けるために男性を船からダイブさせようとするとき何と言えばよいかという話があります。アメリカ人には「今飛び込んだらヒーローになれませ」、イタリア人には「モテませ」、ドイツ人には「飛び込んで下さい。規則ですから」、そして我らが日本人には「皆さん飛び込んではりませ」と言えばよい、と。うまいけど、ちょっと笑えませんね。ブギウギも戦争が終わったところなのですが、戦時中「欲しがりません、勝つまでは」とか「ぜいたくは敵だ」とか（こんな言葉にも、何でもとりあえず根性で何とかしようとする国民性が見えますな）、そういうスローガンを掲げると国民はこぞって右に倣えをします。そして、日本人の弱点と言いますか、「右に倣わない者」を正義の名において攻撃することがあります。ブギウギにもそんな気色の悪いシーンが出てきます。実はつい最近のコロナ禍においても「自粛警察」と称する、誤った正義感を振りかざす人たちがいました。ワクチンを打たない人を罵倒したり、他県のナンバーの車を傷つけたり、マスクをしていない人を攻撃したり、そんなことがありましたね。自分が正しいと信じて疑わないだけに、こういう人はタチが悪いですね。ブギウギではスズ子のつけ睫毛が長いだの、りつ子の化粧やドレスが派手だのと、一般の女性たちから攻撃されます。まして軍人からは踊りながら歌うとか、歌うなら

軍歌に限るとか、アホないちゃもんが入ります。映画「日本のいちばん長い日」を観ると軍人は絶対に政治に関与してはいけないというのがよくわかりますが、ブギウギのようなドラマのほんの些細なシーンからでもそのことが理解できます。

茨田りつ子は慰問に訪れていた鹿児島で軍歌を歌うように要請されます。いったんは断るのですが、特攻隊員の前で歌うと知って、彼らのリクエストに応えどんな歌でも歌おうと決心します。自分から敵艦に突っ込んで死ぬと決まった、まだ年端も行かぬ男の子たちの前でりつ子は歌います。彼らのリクエストは軍歌ではなく、りつ子のヒット曲「別れのブルース」でした。聴き終わると彼らは次々に起立して「ありがとうございました」、「これで晴れ晴れと死ねます」、「思い残すことはありません」と感謝の言葉を述べます。りつ子はいたたまれなくなり、控室に戻り突っ伏して泣きます。戦争が終わっても、この時に耳にした彼らの言葉がりつ子から離れません。自分の歌が死にゆく若者を後押ししたようで、りつ子は苦しみます。スズ子に「だったら、これからはワテらの歌でみんなを元気にさせまひよ」と励まされ、脳裏に浮かぶ若者たちに捧げる鎮魂歌のごとく、全力で「別れのブルース」を歌います。心ふるえる歌声です。そのシーンに涙が止まらなかったわけです。終戦間近、特攻隊員の前で歌ったのは淡谷さんの実体験です。歌の最中に命令が下り、若者たちは淡谷さんに笑顔で敬礼をし、会場を去っていったそうです。淡谷さん、一生忘れなかったでしょうね。

今週のおすすめ

・葉室 麟 『川あかり』 (双葉文庫)

この通信で本を紹介してもう何年になるでしょうか。初めの方に紹介した本など今の中学生は知らないですよ。ということは、通信としては二度目でも生徒諸君には初めてという本がたくさんあるように思いますので、たまには二度目三度目の紹介を。

葉室さんの本で好きなのは『蛸ノ記』、『銀漢の賦』、『散り椿』、『橘花抄』ですが、実は一番のお気に入り『川あかり』なのです。葉室さんは凛とした武士の世界を描いて秀逸な方ですが、『川あかり』の主人公伊東七十郎は藩で一番の臆病者。それが何と家老の暗殺を命じられる。到底そんな剣の腕も、そもそも度胸もないわけで、返り討ち間違いないの状況で一体どうするのかと。しかしこの本は、大雨のため川止めになり木賃宿に逗留する七十郎と、同宿になった一癖も二癖もありそうな連中との触れ合いがもう一つの大きな物語の柱で、こちらの話がなかったら読むに値しません。弱虫ながら最後まで武士であろうと、卑怯なことは決してするまいと、そう決心している七十郎を同宿の連中は次第に放っておけなくなっていく。そのあたり、我欲を捨て、誠実に生きようとする人間に周りの人々は魅力を感じるのだということが、美しく描かれています。是非君たちにも読んでほしいと思います。

ちなみに時代小説はたくさんあって、書店には吉川英治、司馬遼太郎、池波正太郎、藤沢周平、山本周五郎など有名どころの作品がずらっと並んでいます。手に取ってみましょう。私は浅田次郎の『壬生義士伝』と百田尚樹の『影法師』をお勧めします。

BGMは DREAMS COME TRUE の 未来予想図II でした…。